町史とっておきの話 186

東洋大学講師
久野俊彦

高倉宮伝説と法印行鶴

楢戸龍蔵院の高倉宮伝説と宝物

只見町には、高倉宮以仁王が逗留したという伝説があります。以仁王は治承4年(1180)に平氏を討とうとして挙兵しますが、宇治川の合戦で敗れ討ち死にしたというのが史実です。ところが会津地方には、宇治川で敗れた高倉宮は、越後国小国の右馬頭頼光を頼って落ちのび、南会津に逗留して越後に入ったという伝説があります。楢戸の龍蔵院は高倉宮が滞在した所だといわれ、「高倉宮御前霊社之縁記」「高倉宮御前ノ霊社塚記」(宝暦11年、1761)、「高倉宮御伝起」(安政6年写、1859、『只見町史』民俗編)、「高倉宮由来書並絵図面」(明治4年、1871)があります。

法印行鶴の墓碑(右奥)

龍蔵院の法印行鶴(1769～1843)は、享和3年(1803)に、「楢戸村修験宗龍蔵院書上」(『只見町史』資料編1)を記しています。そこに「宝物」として、九寸五分の「古身無銘物剣」(短刀)と「手取釜」(湯釜)を掲げ、その二品は「高倉宮様より下され置き候ふ品と申し伝え」てきたものだと記しています。それに続けて記された高倉宮伝説は、「治承のころ、高倉宮茂仁親王、越後国小国右馬頭頼光を御頼みとおぼしめし、中仙道、上野国より、会津檜枝岐へ御越しにて、当国へ御出あそばされ、南山大内辺、当郷伊北黒谷組長浜村に御住居の所、柳津の住人石川何がしと闘戦あり。宮はひそかに楢戸村龍王院の所まで忍ばせたまひしを、いろいろ忠孝を尽くし、おかくまい申し、しばらく当院に御逗留ありし、その節、右の二品に、手取り釜一つ、九寸五分一腰、龍王院に下し置かせられ、代々持ち伝へ申し候ふ。」と記されています。龍蔵院であった山崎行弘家には、この湯釜と短刀が伝えられ、高倉宮の伝説を語る品となっています。

「高倉宮御伝記」には高倉宮が落ちのびた旅の物語が記されています。物語は現実の地名やモノ(品物)と結びついて伝説となります。高倉宮の物語が、楢戸に結びついていることを具体化するためには、伝説に結びついたモノが必要になります。「高倉宮御伝記」その他の縁起類には、湯釜と短刀のことは書かれていません。これらの宝物は、行鶴の代になって伝説を語るモノとして創出された可能性があります。ほかにも行鶴は、不動明王の石仏を空海作として、その縁起を記しています。

行鶴による書物の収集

行鶴は龍蔵院の蔵書287点のうちの51点に、自分の名や雅号(左京・行鶴・乾林堂)を記入しています。16歳の天明6年(1786)に『秘法口伝』を書写したのをはじめ、19歳で『修験行者伝記』を、20歳で『役君形成記』を書写しています。26歳の寛政6年(1794)には京都に滞在して『役行者霊験記』を買い求めています。行鶴はほかにも多くの書物を求めて集めており、向学心の高さが知られます。さらに行鶴は、密教の説教の台本である『光明真言勧化』を作成しており、行鶴の説教の息づかいを今に知ることができます。龍蔵院の多くの蔵書は、高倉宮伝説の由緒に支えられ、向学心を持って学んだ法印によって形成され、保持されてきたのです。